Cola Minis :
*Handschrift, Form
 und Sprache des
 Muspilli*

橋本郁雄

ザルツブルクの大司教 Adalram (836 年歿) が、時のバイエルン公、後のドイツ王 Ludwig に献じた《Sermo S. Augustini de symbolo contra Judaeos》(聖アウグスティヌスの説教というのは偽伝。以下《Sermo》と略す)の空白ページと下欄余白にドイツ語の書入れがある。これがいわゆる《Muspilli》で、無韻や散文の行を若干含んではいるが、古高ドイツ語の頭韻詩として、文学史上きわめて重要な作品とされている。言語的にはだいたい9世紀はじめの Bairisch であるが、後代の語形も混入していて、《Sermo》に書き込まれた年代は、9世紀後半と推定されている。古写本の発見(1817年)以来、すでに1世紀半を関するにもかかわらず、テキストに欠損や判読困難な箇所があるため、今日に至るまで、本文批判に関する論議は絶えない。ここ20年ばかりの《Muspilli》研究の状況を顧みても、最大の問題は作品の統一性のそれである。なかでも、詩行(以下 V. と略す)37-62の独立性を主張する Georg Baesecke の《Muspilli II》論(Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 82, 1948/50, S. 199-239)をはじめ、エリーアスとアンチクリストの戦いの場を叙する同じ部分に対して、Altsächsisch の原拠を想定する Willy Krogmann の所説(Ehas und Antichrist. Korrespondenzblatt des Vereins für niederdeutsche Sprachforschung 66, 1959, S.

59-63)、さらに《Muspilli II》の挿入が詩全体の統一をすこしも損わないことを強調する Herbert Kolb の論考(vora demo muspilli. Zeitschrift für deutsche Philologie 83, 1964, S. 2-33)などはとくに重要である。またテキストの最初の刊行者 J. A. Schmeller が、V. 57 から選んで題名とした〈muspilli〉は、もっともふつうには〈Weltbrand〉の意味に解せられているが、正確な語源や意味は判明せず、それに関する新説があとを絶たない。たとえば、古ザクセン語源説をとる Krogmann は、これを〈Mundtöter〉、すなわち〈クリスト〉と解き(Eine neue Vermutung über altsächsisch müdspelli. Niederdeutsches Jahrbuch 84, 1961, S. 43-54)、またヘブライ語に起源を求める Herbert W. Sommer は、〈death of wonder〉の意味を導き出している。Braune-Helm-Ebbinghaus 編《Althochdeutsches Lesebuch》(14. Aufl., 2. Druck, 1965)は、実に1ページ半にわたって、〈muspilli〉の語義に関する紛々たる諸説を紹介しているが、素姓も意味も定かならぬ題名は、この詩の問題性を象徴しているかのようである。《Muspilli》はわずか103行の詩にすぎないが、数多くの未解決の問題を包蔵してたえず研究者の探求心を刺戟してやまないのである。ここに紹介しようとするモノグラフィーは、《Muspilli》研究におけるはじめての単行本として、「古高ドイツ文学のもっとも絶望的な作品」(Elias v. Steinmeyer)といわれるこの詩の本文批判を、いま一度徹底的にやり直し、ゆがめられた伝承を正し、もはや窺知しえぬと考えられたこの詩の技巧を追究する。そして、「《Muspilli》を詩節 Strophe に分かとうとするものは、それをプロクルステスの寝台に横たえようとするものだ」という碩学 Hermann Schneider の警告(Muspilli. Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 73, 1936,

S. 29) にも怯まず、敢えて詩節区分を試みるのである。

《Muspilli》の伝本、すなわち古写本《Sermo》は、現在ミュンヘンの Bayrische Bibliothek に所蔵せられる St. Emmeram 修道院文書に属するが、そのテキストには、版本に見るような行分けはなく——たとえば、Hanns Fischer 編《Schrifttafeln zum alt-hochdeutschen Lesebuch》(1966) 所収の2葉によっても、その一斑を知ることができる——、また大文字 Majuskel の使用も版本よりは多い。版本では、大きな段落をあらわすために、V. 31, 73 の二つの Sô だけを大文字とするか、あるいはそれに V. 37 の Daz と、V. 63 の Pidiu を加える程度で、写本の大文字は大部分小文字 Minuskel にかえられている。そして、それとは逆に、写本では小文字が用いられている Elias と Satanâs が大書されている。Minis に詩節区分のきっかけを与えたのは、版本でこのように恣意的なものとして無視されている写本の大文字であった。すなわち、V. 1-5 が意味上一つのまとまりをつくり、かつ各行の主要概念が押韻によって、ゲルマン頭韻詩の雛型を示していることから、V. 6 の Sorgen の紛う方なき S の大文字を、詩節の開始と見たのである。続く V. 6-10, V. 11-17 についても、全く同じことが言われる。しかも、最終行の Abvers は、いずれも詩節を閉じるにふさわしい重いリズムをもつ、と Minis は考える。

5: dâr pâgant siu umpi!
10: daz ist rehto uirinlîh ding!
17: dâr quimit imo hilfâ kinuok!

かくて、V. 1-5, V. 6-10, V. 11-17 がそれぞれ Strophe をつくっている、という Minis の確信は次第に固まってゆく。

詩節区分については、古く W. Müller の

失敗 (Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 3, 1843, S. 452 ff.) があり、Schneider の警告はこの種の試みにブレーキをかけることになった。Minis は前車の轍を踏まぬよう、細心の注意をくばりながら、形態・内容両面から、テキストに綿密な検討を加え、伝えられる 103 行の中から、厳密に頭韻を踏む 82 行を残し、さらに冒頭に 5 行の欠損を想定して、15 詩節よりなる 87 行の原姿を浮き彫りにしたのである。いま、Minis に従い、全詩の構成を表示すれば、次のようになるであろう。

詩節番号	内容	版本詩行	詩節行数
1.			* (5)
2. 死到りて		1-5	5
3. 靈魂憂ひあり		6-10	5
4. 天国に入る悦びあり		11-17(×13)*6	
◇ (第1の説教)		(18-24)	*削除
5. 地獄に墮つる苦しみあり		25-30	6
6. 人なべて神の法廷に召され裁かる		31-36	6
7. エリーアスとアンチクリストの戦ひて		37-43	7
8. 悪しきアンチクリスト敗れ去るべしとや		44-47	*4→7
9. いな、エリーアス傷き敗れて		48-54	7
10. 世は終り滅び来たらん		55-60	6
◇		(61-62)	*削除
◇ (第2の説教)		(63-72)	*削除
11. 天の角笛鳴りわた		73-78(×74)*6	
12. 死者は土より甦り		78-84	6

13. 裁きの庭へと急ぐ	85-89	5	}
14. かくて神の前にす			
べての罪露はに	90-94	5	
◇	(95-98)	* 削除	
15. 懺悔者の前に救ひ	99-103		
の十字架廻る	(99+99a)	* 5	

上表左端の行数を一目すれば瞭然であるように、5行・6行・7行より成る詩節が、それぞれ3詩節ずつグループをつくり、7行詩節群を中心に、

$$(3) \times 5 - 3 \times 6 - \boxed{3 \times 7} - 3 \times 6 - 3 \times 5$$

と、きわめて対称的に配分されている。このような全体的な均斉と比率から、写本の表紙とともに失われた部分は、冒頭の5行、すなわち第1詩節だけであり、それは人間の誕生を歌ったものであったろうというのが Minis の推定である。そのほか上表 * 印のような削除と補訂が試みられている。Gustav Ehrismann は冒頭に約 20 行、結末にそれを若干上まわる欠文を想像したが (Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters. I. Teil, 1914, S. 140), Minis は後述の根拠から、末尾には全然欠失はないと判定する。大きな削除としては、Minis のいわゆる「第1の説教」(V. 18-24) と「第2の説教」(V. 63-72) があり、次いで V. 95-98, V. 61-62, さらに1行だけの V. 13, V. 74 がある。V. 99 と 99a は合して1行となる。

V. 44-47 は、V. 45 (stêt pi demo Sata-nâse, der inan varsenkan scal:) の Anvers と Abvers の間に、大きな脱落が想定されて、次のように7行に拡大された:

der antichrist stêt pî demo altfiante
stêt pî demo satanâse
.....
.....

.....
..... der inan uarsenkan cal.
pidiu scal er in deru uuicsteti uunt
piuallâ
enti in domo sinde sigalôs uuerdan.

誤脱の判定は、この箇所にとりわけ誤記や欠字が目立つこと (たとえば、V. 45 cal → scal, V. 46 uc·eti → uuicsteti, V. 46-47 piuaallaent → piuallâ enti, V. 46 domo → demo), また V. 45 の Satanâse と (var-)senkan の押韻に問題があることなどに基づいてなされたものである。V. 13 の削除理由は、それが散文であること、重子音が単子音に綴られていて (rihhû → rihi), オルトグラフィーの上で他の部分と異なることなどがあげられる。

前述のように、Baesecke は《Muspilli I》(V. 1-36, V. 63-103) と《Muspilli II》(V. 37-62) とを、文体上から区別したが、Minis は、Kolb の所説などを援用して、Muspilli II は Muspilli I にとって不可欠であるという立場をとり、むしろ V. 8-24 と V. 61-72 をあとの挿入と見るのである。前者においては、その根拠として、まず V. 22-24 の2語より成る短い Anvers があげられる。

22 pehhes pîna: dâr piutit
23 heizzan lauc. sô mac huckan
24 sorgên drâto, der sih.....

たしかに、これは他に見られない特徴的なスタイルである。また V. 22, 23 の頭韻語 (pehhes - pîna - piutit; heizzan - huckan) 相互の間に、想念上の関連が見出されず、主要概念の押韻という原則が、ここでは破れていること、got の g- が、ここだけで、k- (kotes) と綴られているなど、主な削除理由となっている。

神の法廷に出頭するにあたっての心得を説

く「第2の説教」(V. 63-72)は「第1の説教」と同じく, *pidu* (それゆえに) で始まる説教調であって, この詩を救済告知の文学と見る Minis の描く全体像にそぐわない。しかも, 「第1の説教」は《*Sermo*》の第1章と, 「第2の説教」はその第4章と内容的に関連があり, また, V. 67 はカール大帝の《*Capitulare missorum generale*》第9章の主要箇所と, 著しい平行関係を示している。おそらく Ludwig ドイツ王の発意で, 《*Capitulare*》と《*Sermo*》の両方の内容に通じているバイエルン出身の聖職者によって, 《*Sermo*》への書入れが行なわれたのであろう。書記者は頭韻を踏む説教を挿入しながら, Niederfränkisch の原本を, Bairisch に転写したが, 原作者の方言が僅かながら名残りをとどめることになった——と Minis は推定するのである。

「第2の説教」に先立つ V. 61-62 は, V. 60 に続くかに見えるが,

61 Diu marha ist farprunnan,
 …………… sela stet pidungan,
 62 niuiz mit uuiu puaze:
 so uerit si za uuiuze.

のように, 各行の Anvers と Abvers とが脚韻を踏み, 内容的にも, 審判の日, 靈魂の辿る運命について, あとから加えられたいわば注記と考えられるとして, この頭韻詩から除外された。

V. 74 は韻文ではなく, 従来も削除, ないしは括弧にくくられている。次に問題となるのは, V. 90-98 であるが, そのうち V. 97-98 は, Baesecke や Schneider の指摘をまつまでもなく散文であるから, まずこれが除かれるが, V. 91-95 については両大家の見解は分かれ, Baesecke はこれを <*unecht*> としてしりぞけ, Schneider はこれを <*echt*> と認める。Minis は V. 95-96 を内容的には V. 94 の繰返しと見て, これを削り, 5

行というまとまりをつけるために, 残る V. 90-94 に <*echt*> の判定を下だすのである。こうなると, 全体の均斉と相称を満足させるために, また次に触れる数象徴的観点からも, 最終詩節は5行とならざるをえない。かくて, V. 99 と 99a は合して1行とされるのである。

最後に, Minis は《*Muspilli*》のシンメトリカルな構成にあらわれた象徴数の解釈を試みる。詩は, クリストが人類を原罪から救済するために負うた十字架の顕現をもって終わる。最終詩節が暗示しているのは, 十字架による救済 *Salus Crusis* である。それはおそらくある布教の中心地——Fulda? ——と結びついた救済の告知を意味するものであろう。Minis は Johannes Rathofer の《*Der Heliand, Theologischer Sinn als tektonische Form*》(1962) に収められている Hrabanus

Maurus の十字架救済の図が,
 たてよこ5字から成ることにヒ
 ントを得て, 十字架による救済
 告知を歌う第15詩節の行数は

	C
	R
S	A
L	U
U	S
X	

5でなければならぬと主張する。また, 詩の構造の中心にある7の象徴性については, Isidor に解釈の根拠を求め, 7は創造の第7日, すなわち永遠の平安への希望の象徴と解釈する。さらに 15(3×5) や 12(2×6) についても, その象徴価の解明を試みるが, その論述はかならずしも説得力がつかない。むしろ7行詩節の両翼が 3×5+3×6=33 になることが見過ごされている点が指摘されるべきであろう。言うまでもなく, 33は十字架を負うたクリストの年齢であり, ここではとりわけ重要な象徴価値をもつからである。

最終章に, 研究の結晶である15詩節87行のテキストが掲げられる。欠損部と判読不可能な箇所は, 強いて補填せず, …… で示されている。一例を示せば, 最終詩節の第1行

(V. 99a+99) は、
Denne ……, der gipuazzit .apêt, denner
ze der ……,
となる。残された詩行のなかで、従来の版本と比べて、とくに大きな相異を示しているのは、V. 55 であろう。冒頭の部分は、従来推定形としてイタリック体で示されるが、ここでは……を用いるどころか、立体活字で確信をもって解説を示しているのである。いま、Braune のテキストの該当詩行と対比させるならば、

(Braune:) *sten ni kistentit. verit denne
suatago in lant,*
(Minis:) *denni kistên ti teikin in erdu,
uerit denne tuatāgo in lant,*

となるが、Minis のテキストでは Anvers の *in* 以外は、推定形ではない。*in* が *teikin* の尾音の影響で脱落したことは、十分ありうることであろう。添えられた写本の部分写真によれば、たしかに *denni kisten ti teikin erdu* と読めるのである。これまでは、V. 54 (「…月落ち大地燃え」) に続いて、「岩また揺ぐ。かくて懺悔の日この地に到りて」と読まれていたが、Minis の解説に従えば、「この^{しとし}徴世に現はるとき、裁きの日この地に来りて」となり、ここに新しく詩節が起こされる。しかも、*teikin* と *tuatgo* は頭韻を踏む。しかし、これは Bainsch による押韻ではなく、Niederfränkisch によるものである。つまり原作者の方言が、バイエルン人の手を経て、なお生き残ったのである。詩人にとっての最大の関心事が、*muspilli* 「世界の滅亡」ではなく、「最後の審判の日」の詩的叙述にあったとすれば、*tuatāgo*こそ、詩の核心でなければならぬ。これは注目すべき提唱であると思う。

また、V. 79 の *marha* は、原本においては、*engila* と頭韻を踏む *erda* ではなかった

か、という疑問が提出されている。たしかに押韻の上からだけでなく、意味上も *himlisca* (V. 73) に対応する *erda* の方が、*marha* よりもはるかにふさわしい。

さて、Minis のテキストは、散文や脚韻を踏む詩行を除くことにより、純粋な頭韻詩となった。しかも、構成は均斉と相称の美を示し、これに数象徴的褒づけも試みられた。結果の斬新さは、瞠目に値するものがある。しかし、テキストを通覧して、誰にも起こる疑問は、詩節区分のきっかけになった大文字についてであろう。15 の詩節のうちで、大文字ではじまる詩節の数は 10 であるが、詩節の冒頭以外での大文字使用が 6 回を数えるのである。しかも興味深いことは、6 回とも D ではじまることである (Dâr 3 回, Daz 1 回, Denne 2 回)。もしこれを書記者の書き癖とするならば、詩節冒頭の D ではじまる 5 回の場合 (Daz, Doh 各 1 回, Denne 3 回) も問題となろう。とすると、残るは Sorgen 1 回, Sò 2 回, Une 2 回となる。第 5 節冒頭の Une の U は、大と小の中間の大きさであるから (本書 48 ページ)、無条件に容認せられる詩節冒頭の大文字は 4 回だけとなり、大文字は詩節区分の有力なきめ手とはなりがたいように思われる。それとも、このように困難な状況にあって、よく大文字のもつ意味を探り当てた Minis の焔眼を讃えるべきであろうか。ともあれ、プロクルステスの暴挙とされた《Muspilli》の詩節区分に、敢然と立ち向かった勇氣とその一往の成果は、《Muspilli》研究史上特筆されねばなるまい。その手さばきには、快刀乱麻を断つ感さえあるが、しかしその主張は大胆な仮説に満ち、多くの問題をはらんでいる。とくに、数象徴による解釈は論証が十分でないように思われるのである。形式構造から、文学作品を解明する手法は、中世文学研究の新しい方法論の

一つとして、最近頃に注目されているが、それによれば、中世には現代とは全く異なった思考形式があって、この形式の発見が作品解明の鍵となるのである。Hans Eggers は《Symmetrie und Proportion epischen Erzählens. Studien zur Kunstform Hartmanns von Aue》(1956)において、この問題を取り扱った。また、中世における数のもつ意味を究明することの重要性についても、これまでたびたび指摘されてきた。数象徴による作品解釈は、中世の、とりわけ宗教文学研究における一つの傾向にさえなりつつある。Rathofer の《Heliand》研究は、そのすぐれた成功例と言うことができよう。彼は、9世紀のこの古ザクセン語の長篇叙事詩が、あたかも建築設計図のような精密さで構築されていることを、数字によって証明してみせた。Rathofer の業績に刺戟と示唆を受けた Minis は、自らの成果をさらに数象徴的解釈によって確かめようとした。しかし、《Die Zahlen-symbolik der Strophen und der Strophenzeilen》と題する章は、前述のようにかならずしも十分には確証の役割を演じてはいないように思われる。今後さらに研究の余地があるのではなからうか。

Minis 論文は、学界にけっして小さくない波紋を呼び起こしたにちがいない——そう私は予想するのであるが、私の目に触れた論評はいまだ2篇にすぎない。その一つは、《Wirkendes Wort》(1967, Heft 5, S. 358)に載った Bernhard Sowinski の短評である。これはなにぶんにも1ページの短いものなので、十分に論議はつくされていないけれど、本書の成果をかなり高く評価している。他の一つは、Hans-Hugo Steinhoff のもので、《Anzeiger für deutsches Altertum und deutsche Literatur》(1968, S. 5-12)に発表せられた。彼は Strophe と Leseabschnitt

の混同を難じ、何よりも Strophe 概念の確立を要求する。手きびしい彼の批評は、そのまま、長行詩をめぐる Werner Schröder の Friedrich Maurer 批判を受け継ぐものであ(注1)る。この論争は今後さらに発展するであろう。また数象徴的解釈にもはげしい批難の矢を向ける。たとえば、かの Hrabanus Maurus の十字架図の縦は、もちろん CRLUX ではなく、CRUX と読むのだから、これを5字に数えるのはナンセンスだという。むしろ、これは CRUX (4字)+SALUX (5字)=9、すなわち天軍の数と関係があるとして、Hrabanus から直接証言を引き出ししている。さらに他の象徴数についても、Steinhoff は逐一反駁を加え、Minis の解釈を誤った数神秘主義の好見本と扱き下ろすのである。かように彼は論駁に終始し、Minis 論文には一顧の価値をも認めようとなしないのである。われわれは相反する評価を前にして、戸惑わざるをえないが、Minis の提起した問題はあまりにも多く、論議は始まったばかりである。しかし論争の中心となるのは、やはり Strophe と Zahlen-symbolik に関する問題であらう。Minis 論文が、将来どのような評価をかちうるかは、まことに興味深いものがある。

(注1) Fr. Maurer の論文: über Langzeilen und Langzeilenstrophen in der ältesten deutschen Dichtung (1951); Langzeilenstrophen und fortlaufende Reimpaare (1959), 両篇とも論文集《Dichtung und Sprache des Mittelalters》(1963)に再録されている。また《Die religiösen Dichtungen des 11. und 12. Jahrhunderts》2 Bde. (1964, 1965)をも参照。

W. Schröder の論文: Zu Friedrich Maurers Neuedition der deutschen religiösen Dichtungen des 11. und 12. Jahrhunderts (Beiträge zur Geschichte der deutschen

Sprache und Literatur. 88, Tübingen, S. 249-284; とくに S. 281).

ちなみに、Minis が本書をフライブルクの Fr. Maurer 教授に献げ、これを批判する Steinhoff はマールブルクの W. Schröder 教授の助手であることは興味深い。

(注 2) 《Muspilli》に関して 2 篇の好論文をものしているベルリンの H. Kolb 教授は私信の中で、「Minis 論文はなかなか anregend だが、その数象徴解釈はいささか穿ちすぎているように思われる」という私の感想に対して、同感の意を表わし、次のように述べている。——〈Ihre Kritik an Cola Minis' kleinem Buch über das 'Muspilli'-Gedicht teile ich durchaus. Ich hätte sie auch schriftlich ausgedrückt, wenn ich dazu gekommen wäre, eine Besprechung darüber für eine germanistische Zeitschrift, um die ich gebeten worden war, auch anzufertigen. Aber leider bin ich dazu—— wie in letzter Zeit zu vielem anderen—— nicht gekommen.〉氏が書評を乞われながら、果たさなかった理由は明らかではないが、少なくとも、氏が Minis の数象徴解釈に批判的であることだけは察知できる。

(後記) 著者 C. Minis 教授はアムステルダム のゲルマニストで、中世ドイツ文学の研究者として知られている。

(1968 年 9 月)

Cola Minis: *Handschrift, Form und Sprache des Muspilli*. (Philologische Studien und Quellen, H. 35). Berlin, 1966, Erich Schmitt Verlag, 112 S., 4 Tafeln.

Jan Ate van Ek :

Four Complementary Structures of Predication in Contemporary British English: An Inventory

山川喜久男

著者 J. A. van Ek は、ユトレヒト大学付属の応用言語学部に勤務し、オランダにおける英文法学界の重鎮 R. W. Zandvoort の後継者とみなされる新進の英語学者である。本書は、1966 年 7 月 1 日グローニンゲン大学に博士号申請論文として提出したものである。副題に「目録」(An Inventory) と断わっているように、現代英語の統語法に関する特殊研究としても、言語分析を理論的に論述することではなく、一応容認される理論の上に立って実地に行なわれた統計的調査の結果を整然と報告することを主旨としている。この慎ましやかな副題は、かえって如実に、著者の言語事実の記述に対する準備工作の周到さと実証的調査の厳正さを伝えている。それは地道で堅実な研究調査の凝縮された成果といえるが、英語の統語法の実態に関心をもつ読者には、従来の文法書や特殊研究の類からは学びえない貴重な知識を、この「目録」から読みとりうる点が少なくない。207 ページの小著ではあるが、各種の事項の提示の様式は実に一分のすきのない組織立ったものであり、しかも整然とした形式の底には著者の資料に対する判断とその処理の適正さをうかがわせるに足るものがある。

本書は、つぎの 3 部からなっている。第 1 部の「序」(Introduction) は、本書において企てた調査の目的と対象の範囲を述べ、記述の基礎となる諸概念を明確に、そして穩健に、